「役を演じる」経験による高校生の自己の揺らぎ
―演劇の授業における演技実践のエスノグラフィー―

東京学芸大学大学院　**鎌田麻衣子**

【キーワード】役を演じる，アイデンティティ，自己の揺らぎ，演劇の授業，エスノグラフィー

1　はじめに

今日わが国の高等学校では，専門学科として，あるいは学校設定教科・科目として「演劇」の授業が行われている(1)。そこでは必ずしも俳優になる訳ではない一般の高校生に対して，全人的な人格発達や表現力の育成等を目的として演劇が教えられている。しかし高校教育としての統一的な指針や要領がある訳ではない為，その指導は各種各様である。

高等学校というのは，青年期後期に入った若者が進学や社会に出る前に一定の時間を過ごす場所である。その青年期後期の人間にとっての大きな課題とは何か。社会心理学の視点から人間の健康なパーソナリティについて臨床的・人類学的考察を行ったエリク・H・エリクソン(Erikson/1959)は青年期の問題を「アイデンティティとアイデンティティ拡散」の危機であると指摘した(2)。子ども期に作られてきたそれまでの自己から，社会へ出て行く自己との葛藤が生じる時期である。エリクソンはその葛藤は悪化すると神経症のような症状を呈し悲劇を招く事もあるが，青年期は病気ではなく標準的な危機であり，その場合「手に入るエネルギーも豊富である」と述べる(3)。どのような自分がこの先の社会をどう生きて行くかを決める大事な葛藤であり，ゆえにその葛藤で生じる自己の揺らぎも大きい。これからの人生を生きていくエネルギーを得る大事な揺らぎの経験である。

ではそうした自己の問題を抱える青年期の高校生が演劇を経験するというのはどのような事であろうか。例えば眞仁田は演劇部の生徒への質問紙調査の分析から，演劇の特質と青年心理とを比較し高校生が演劇を愛好する要因を明らかにしている(4)。しかし実証的な研究はなされておらず，その後を跡付ける研究もほとんどない。一方，高校における演劇教育実践の記録には「演劇をやると生徒が変わる」という物語が数多く残されてきた。例えば竹内は定時制高校で自身が行った演劇の授業実践の中での生徒の変化を豊かに描き(5)，石井は学校生活上のある種の困難を抱える生徒が演劇の授業に関わる中で変化していく様子を描いている(6)。これらの豊かな実践記録は多くの示唆と教訓を与えてくれる貴重な資料であるが，描かれている演劇実践のどの活動も複合的な要素を併せ持つ活動である為，具体的に何がどのように生徒の変化に影響を及ぼしているのかが判然としない場合が多い。

そこで本研究では演劇の中でも特に「役を演じる」活動に焦点化したい。その理由は，役を演じる活動は，役という架空の人格に出会う事であり，またその人格を自分の身体を通して演じる活動だからである。したがってある人格に出会い，自分の身体を使うような役を演じる活動は，自己の葛藤に直面する青年期の高校生に大きな揺らぎの経験を与えている可能性がある。しかしこれまでにそのような事を明らかにする研究はほとんどなされていない。

ゆえに本論文では，青年期の自己の葛藤場面を「自己の揺らぎ」と定義し，高校生が「役を演

じる」事でどのような自己の揺らぎを経験するのかを明らかにする事を目的とする。演劇の授業における生徒の自己の揺らぎの経験を質的研究法の一つであるエスノグラフィーによって描き，それが青年期の自己の課題にとってどのような意味があるのかを分析する。

2　調査概要

調査は都市近郊の公立S高校の学校設定科目「演劇Ⅱ」の授業で行った。この授業は「演劇Ⅰ」を2年次に履修した生徒が履修できる3年次の科目で，週1回50分2コマ続きの2単位（前期18回，後期13回）の授業である。履修生徒は10名（男子2名，女子8名）であった。「演劇Ⅰ」では台本を用いない即興演劇を行っていた。授業は筆者（以下「講師」）が行った。三十代男性の専任教諭1人（以下「ツダ先生」）がティームティーチャー（以下「TT」）として入っていた。

研究対象授業は6回である。授業の主なテーマは「役を演じる」事である。今回の調査では台本を読む事から役を作っていく方法（4回）と，台本を読まずに大体の粗筋とその役の状況を元に即興的に演じる方法（2回）を用いた。題材は，前者は「ロミオとジュリエット[(7)]」，後者は「ガラスの動物園[(8)]」を用いた。題材の選定理由は①世界的に有名であり芸術として評価の定まった作品であり，②主人公の年齢が生徒達と近く想像しやすい事，③主人公の人間としての葛藤が描かれているからである。生徒達は前者では全員が主役を，後者では主要な役を交代で演じた。具体的には，前者では最初から最後までの通し台本を渡し読んで来てもらい，授業では主にその一部の三幕三場（ロミオ），三幕五場（ジュリエット）を台本は手に持ったままで演じた。後者では台本は渡さず，物語内容や演じる場面の説明資料から物語を想像し，その上で自分の言葉で場面の流れに沿って即興的に演じた。同じ場面の即興に設定を付け加えて演じる課題も行った。どちらのどの場面も概ね3〜5分程度の長さであった。調査内容とデータの収集は表1の通りである。なお，調査の実施にあたっては調査内容を説明した上で校長および生徒に同意を得て行った。1名同意書未提出の為分析対象は9名である。

表1. 調査内容とデータ収集時期

	調査対象授業の内容	データ収集
事前	○3/19（研究についてと授業内容の趣旨について説明） ・『ロミオとジュリエット』の台本を配布。 ・課題①［台本を読む］（春休みに台本を読んでくるように伝える）	・事前質問紙調査（題材を公表する前に実施）
ロミオとジュリエット	○4/16（台本の内容理解） ・課題②［身近に感じた箇所］［感じなかった箇所］ ・課題③［台本の理解］（クラス全体で台本理解を進める） ○4/23 ・課題⑤［能動的空想］（二幕二場，三幕一場） ・課題⑥［練習1］（三幕三場，三幕五場） ○5/7 ・課題⑦［練習2］（三幕三場，三幕五場） ○5/14 ・課題⑧［目的・課題］（演じる場面の役の行動の一つひとつの目的・課題を考える） ・課題⑨［本番］（三幕三場，三幕五場）（ロミオ，ジュリエットそれぞれの場面を順番に演じる）	・課題④［宿題］（役の理解） ・コメントシート（4/23） ・コメントシート（5/7） ・コメントシート（5/14） ・フィールドノーツ（各回） ・ビデオ録画（5/14） ・TT振り返り（各回）

ガラスの動物園	○5/21 ・課題⑩［一場］（アマンダ，ローラ，トム） ・課題⑪［三場］（アマンダ，ローラ，トム） ○5/28 ・課題⑫［三場再演］（再度新しい状況を加えて演じる。アマンダ，ローラ，トム） ・課題⑬［六場］（アマンダ，ローラ，トム，ジム）	・コメントシート（5/21） ・コメントシート（5/28） ・フィールドノーツ（各回） ・ビデオ録画（各回） ・TT 振り返り（各回）
事後	○6/4	・事後質問紙調査① ・事後個別インタビュー①（演技中の事）
	○7/23	・事後質問紙調査② ・事後個別インタビュー②（自己の変化について）

3　研究方法とデータ

本研究では，様々なデータから文脈依存的に分析する質的なアプローチであるエスノグラフィーを採用する[9]。調査において収集したデータは①事前質問紙，②フィールドノーツ（以下「ノーツ」），③ TT との振り返り，④演技中のビデオ録画，⑤生徒記述の宿題・コメントシート，⑥事後質問紙，⑦事後インタビューである。

事前質問紙は，生徒が役を演じる前に自己についてどのような認識を持っているか，また役を演じる事についてどのような認識をもっているかを記述式で回答してもらった。質問項目は表2の通りである。

表2. 事前質問紙調査質問項目

	質問項目（カッコ内は省略表記。生徒配布の質問紙には未記入）
1	自分の事を自分はどんな人だと思っていますか？（自分で思う自分）
2	他人から見て自分はどんな人に見られていると思いますか？（他人から見た自分）
3	自分が思う自分と他人から思われている自分にどのような違いがありますか？（自他の認識について）
4	今の自分の変えたいところはどこですか？（自分の変えたい所）
5	今の自分の変えたくないところはどこですか？（自分の変えたくない所）
6	役を演じる事はどのような事だと思っていますか？（演じる事についての認識）
7	どんな役を演じてみたいですか。またそれはどうしてですか？（やりたい役）
8	どんな役だと演じるのが嫌ですか。またそれはどうしてですか？（やりたくない役）
9	役を演じる事によって自分が変わると思いますか？変わるとしたらどのように変わると思いますか？（演じる事による自分の変化への期待）
10	これから役を演じますが，どんな気分ですか？（演じる前の気分）

ノーツは授業が始まる前の生徒の様子から授業中の教師と生徒のやりとりを授業直後に筆者が記述した。TT との振り返りは IC レコーダーで録音し文字に起こした。演技中の生徒の様子をビデオカメラで録画し発言内容や生徒の行動を文字に起こしテキストデータ化した。生徒記述の宿題・コメントシートは，生徒の学習を深め生徒が授業を振り返る為に行う物であると同時に本研究のデータとした。宿題は役の理解を深める為に行った。コメントシートはその日の授業で役を演じてみて思った事，考えた事などをどの役を演じた時か分かるように記述してもらった。事後質問紙は役を演じる事の認識に変化があったか，役を演じる前と比べて自己認識に変化があった

かを調べる為に記述式で行った。6/4の1回目と，7/23の2回目は同じ質問紙で行った。質問項目は表3の通りである。事後インタビューは6/4の1回目は役を演じた時の事について質問した。7/23の2回目は役を演じる事を経ての自己認識の変化について質問した。すべてICレコーダーで録音し文字に起こした。これらの得られたデータを元に生徒の自己の揺らぎの経験を描き，分析する。

表3．事後質問紙調査質問項目

	質問項目（カッコ内は省略表記。生徒配布の質問紙には未記入）
1	これまでの授業の中で何が印象に残っていますか？またそれはなぜですか？（印象に残っている事）
2	授業を受ける前と比べて，役を演じる事についてのあなたの考えはどのように変わりましたか？（演じる事の認識の変化）
3	役を演じる事を経験して，あなた自身はどのように変わりましたか？（自己認識の変化）
4	その他，何か思った事，考えた事はありますか？自由に書いてください。（自由記述）

4　結果

(1) 事前質問紙調査の結果

記述式で行った事前質問紙の結果について，生徒の回答に基づいて表4にまとめた。また同じ表に生徒が演じた役を挙げた。ロミオとジュリエットは，男子と女子の希望者はロミオ，その他の女子はジュリエットである。ガラスの動物園は，場面ごとに演じたい役を本人に挙げてもらいその都度指名して演じた役である。（以下《》内は台詞，〈〉内は即興を演じる時の設定）

表4．事前質問紙の結果

仮名	性	生徒像・事前質問紙の特徴的な記述（「」内は質問紙からの直接引用）	演じた役
アキラ	F	アキラは「自分がやりたいと思う事しか動けない。自由人」である。一方「人がやっていて自分もやらなきゃいけないのに，悪い意味で人に流されにくい所」は変えたいと思っている。演じる事によって自分は「変わる。違う人になるから変わる」と予想している。	ジュリエット アマンダ，ローラ，トム
アユミ	F	アユミは「優柔不断，周りを気にしすぎる」人である。そして「自分に自信が持てるようになりたい」と考えている。一方で「元気さ」は変えたくない所だ。演じる事については「自分がその役になりきって上手く演じられるか不安（イメージできるか…）」と感じている。	ジュリエット アマンダ，ローラ，トム
サエ	F	サエは「明るい。ポジティブ。楽しい事が好き」な人である。他人からは「うるさい。しっかりしてない。笑い方やば。いい子」と思われていると感じている。そんなサエは「笑い方。自分が発信する言葉の種類を変えたい。行動」を変えたいと思っている。やりたい役は「ヒロイン。死んじゃう役。流星君（※芸能人）に壁ドンされる役。賢人君（※芸能人）と付き合う役」である。	ジュリエット アマンダ，ローラ，トム （※は筆者加筆）
ソウタ	M	ソウタは自分の事を「パンピ。普通人」であるという。他人から見た自分は「空気」だと思っている。一方「今の自分を変えるというのは現状から逃げている事になる。今の自分を肯定出来なくなったら終わりだと思っている」という。しかし，そうは言っても変えたくない所も「ない」。防衛している今の自分も確たる所がある訳ではない。	ロミオ ローラ，トム
タツヤ	M	タツヤは「面倒くさがりや」な人である。他人からは「うるさい」と思われていると感じている。自分の変えたい所は「すぐにマイナス思考になる事」である。タツヤにとって演じる事は「違う自分になれる事」だ。演じている間は違う自分を期待している。	ロミオ アマンダ，ローラ，トム
ヒカリ	F	ヒカリは自分の事を「うるさい，ネガティブ，しつこい，暗い，飽きっぽい」人であると認識している。変えたい所は「飽きっぽい所」だ。一方，変えたくない所は「特にない」。否定的な自己認識が強い。	ジュリエット アマンダ，ローラ

マユ	F	マユは「チビ。ネガティブ。価値や意味を求める」人である。他人からは「穏やか。優しい。真面目」と思われているが，本人としては「穏やかじゃなくて，マイペースなだけ」である。役を演じる事に対して「いろんな役をやってみたい。とても良い経験になると思うから」と積極的に捉えている。	ジュリエット アマンダ，ローラ
ユウ	F	ユウは「面倒くさがり屋」で「自分から動かない」人である。他人からは「楽しいなー，優しい，面白い」と思われているようであるが，本心では「自分ネガティブだなー」と思う。しかしそんなユウは「なんか前向きになりたい」と思っている。演じる事で自分は「そりゃー変わる」と思う。「なんか新しい自分になりそう」と期待感を抱いている。	ロミオ アマンダ，ローラ，トム
リカ	F	リカは「面倒くさがり，飽き性」である。そんな自分は他人からは「関わり辛そう」に見える。一方「責任感が欲しい」とも思っている。自分から何かをして，責任を持って行動できるようになりたいが今は出来ていないのだ。演じる事も，演じる事で自分が変化するかも今はまだ「分からない」。	ジュリエット アマンダ，ローラ，トム

(2) 役を演じる事による自己の揺らぎ

生徒達は役を演じる中で様々な反応や態度を示している事がデータから明らかになった。その中でも事前調査で明らかになったこれまでの自己認識との対比の上で，生徒が自己について葛藤し，自己の認識を変えていくような場面について幾つかのきっかけがある事が解った。生徒達はそれらのきっかけで動揺したり，不安になったり，悩んだり，気づいたりしていた。以下に「役を演じる」事で生じた幾つかのきっかけから自己が揺らぐ生徒の様子を描きたい。

① 身体的な特徴や性による自己の揺らぎ──アユミ

アユミは周りの友達をいつも笑わせているような女子にも男子にも慕われる元気な生徒である。他方で髪型を気にするなど他人の目に自分がどう映るかを気にしている人でもある。アユミはジュリエットを演じる事を選んだ。台本を読み，役を演じる為に積極的に準備をしていた。

そんなアユミの自己が揺らいだのは衣装を巡る一件である。4/23，授業前の空き時間に廊下で友人と話していたアユミに，講師はジュリエット役の衣装（ノースリーブの白いワンピース）を持って行った。その衣装は過去の代の発表会でジュリエットを演じた生徒が着た衣装であった。その時の講師に深い考えはなく，これからロミオとジュリエットを演じる今の生徒たちに想像力を喚起する小道具として見せようとしただけであった。講師の手にある服を見た瞬間，アユミは表情が曇り「えっ衣装着るの？」と言う。好意的に受け取られると思っていた講師はアユミの反応に驚いた。講師が「いや，今日は着ないけどなんかロミジュリに使えそうな物がないかなと思って。どうかな？」と言うと，アユミは不安げな表情のまま「え，でも私衣装とか分かんないんだよね，センスないし」と言いこの話題を避けようとした。その時講師ははたと気づいた。どちらかというと大柄で活発でもあるアユミが，もしジュリエットをやるとしてもこの華奢な造りのワンピースは着ないかもしれない。アユミはその衣装から発せられるジュリエットのイメージを暗に押し付けられ，しかも自分がそのイメージと合わないのではないか，と思ったかもしれないと思った。講師はこの話はこれで止めようと思い「ま，なんかイメージが膨らめばいいかなと思って」とごまかしその場を去った。

授業を始めようと生徒達を見るとアユミの様子がおかしい。俯き加減で髪に隠れた表情は見えない。心配になった講師が「アユミ大丈夫？」と声を掛けると，顔を上げるが返事はしない。他の皆よりも一歩後ろに椅子を置いて座る。講師は心配だったがそのまま授業を進めた。

授業中盤，アユミは課題⑤のジュリエットの一場面を演じる事になった。アユミの表情は曇っ

たままで，前に出て来てもどうやって演じればいいのか分からないといった様子であった。一応演じるものの，とりあえず行動をしただけで集中力を欠いたものであった。

一方で，女子でロミオ役を選んでいたユウが決闘シーンを演じる段になると，座っていたアユミはぼそっと「私もやりたい」と呟いた。自分の役であるジュリエットのシーンは積極的にやれなかったにも拘わらず，他の人のロミオ役のシーンはやってみたいと言う。その発言は，アユミはジュリエットをやりたくないのかなと周りの人に思わせた。この時点でアユミは役に対する自分について避けがたい揺らぎがあった。

前の週までジュリエットを演じる為に役や物語について知ろうと努力していたアユミが，この日の授業前に衣装を見せられた事によってジュリエット役に纏わりつく女性性のイメージを突き付けられ，自分は役に合わないのではないかという不安が生まれた。そこで女性性とは真逆の男気溢れる決闘シーンの方が，もしかして自分には合っているのかもしれないと思わされたのだ。

しかしアユミは演じる役をロミオに変える事はなかった。この日以降，アユミは自分の中にある女性性への意識がはっきりしたのだろう。その後，ジュリエットを自分なりに理解していく事によってアユミは最後まで演じる事が出来た。5/14の課題⑨の［本番］では，アユミの中に手ごたえがあったのか，終わった直後にガッツポーズをしていた。事後インタビューでその時何故ガッツポーズをしたのかと問うと，アユミはその事自体は忘れていたが「最後はどんどんやるにつれて内容も，なんかその役の気持ちとかも結構分かってきて，でわりと，一番，ジュリエットとして演じられたのかなと思って」と明るく答えている。一方で，自ら記述した事後質問紙の印象に残っている事には「4/23バルコニーシーンは理解していない状態でやっていたから混乱して分からない気持ちが強くて覚えている」と書いている。ジュリエットを上手く演じられた時よりも混乱していた時の方がアユミには強く印象に残った。それは役のイメージに対する葛藤によって揺らいだ時であり，またその葛藤を乗り越えるきっかけになった出来事だったからであろう。

② 恋愛，結婚に直面する事による自己の揺らぎ──サエ

サエは明るい所が取り柄の天真爛漫な生徒である。授業で扱う題材がロミオとジュリエットだと分かると「ロミジュリやりたかったんだよね」と楽しそうに応じる。サエはこの作品をやれる事が嬉しそうであった。それは，主人公の恋愛に関わる出来事に強い興味や憧れがあったからだ。

しかし，憧れたジュリエットを演じたかったサエだったが，自分の経験には役と似たような状況がない事や，「やっぱりお嬢様だからとても難しかった」と言うように，自分とは違い過ぎる境遇であるジュリエットを演じる事はサエにとっては困難であった。ただ，自分にはまだ経験のない命を賭けるような恋愛をするジュリエットにサエは圧倒されていた。

サエに大きな揺らぎが訪れたのは「ガラスの動物園」を演じていく中であった。特にローラの存在がサエに迫ってきた事が大きい。ローラは高校を中退してビジネススクールに行くも，一日で離脱してしまうような社会に出られていない若者である。それを心配する母親のアマンダは，仕事ができないなら結婚を，とローラに青年紳士を紹介しようとする。5/14サエはローラがビジネススクールに行っていなかった事がアマンダにばれるという話を聞くとやりきれないという表情で「あ〜バレちゃうんだ」とローラに同情する。サエは以前，卒業後は「あたしはフリーター」と言っていた。進学も就職も考えていなかった。だからといってサエはローラと同じで恋愛もしていない。サエはなんとなくローラの状況と自分の状況に重なる部分を感じていた。

5/28,「今日はなんかサエが調子良くなかったですね」とツダ先生は振り返った。サエはこの日，教室に入ってきた時からいつものような明るさがなかった。課題⑫で［三場］を演じる時に「ローラ役はどう？」と講師が声を掛けると，サエは「あーあたし今日やる気ないんだよね」と言いながら気の乗らない顔で前に出てくる。サエは一応，ローラを演じた。

課題⑬で［六場］を演じる時も「えーやりたくない」と言っていた。しかしやる気がないと言いながらも，サエはローラに纏わる物語は気になってしょうがなかった。六場は，ローラが高校時代にひそかに好意を寄せていたジムという青年が弟のトムの紹介で家に来る，という場面である。高校時代に好きだった人が数年後に偶然にも訪ねて来る，という状況はサエにとっては「運命の出会い」に思えた。サエはつい「それって運命の出会いじゃん」と近くにいたツダ先生に話しかけていた。「そういう出会いってあるのかな？」と人生の先輩に聞いてみたくなった。ツダ先生は「あるんじゃない？」と言って，小学校の同級生と同窓会での再会を期に結婚した，という自分の話をサエにしてあげた。その話に興奮して盛り上がりながらも，サエは自分にまだ恋愛経験がない事をツダ先生に打ち明けた。これから自分にもそういう出会いが果たして訪れるのだろうかという不安がサエにあったからだろう。六場ではサエはアマンダを演じた。

サエは自分の境遇と似たような状況にあるローラに起こる出来事に接して，今まであまり深く考えてこなかった自分のこれからの人生について，期待と不安を身に染みて感じ大きく揺らいだ。サエは事後質問紙の印象に残った事として「ガラスの動物園は全部印象に残った。ローラとか母とかすごい大変に感じた。その人自体が」と書いている。その人自体，という事にはローラやアマンダを演じたサエ自身の経験が含まれている。しかし，その経験を経て，サエは自分について「すごい幅が広がったし，なんか成長した気がする」と感じた。

③ 人生への価値の模索による自己の揺らぎ──マユ

マユは大人しい優等生タイプで，とても真面目な生徒である。ただ人前で演じる事にはまだ恥ずかしさや自信のなさを抱えている。演劇の授業を2年目も選択したのは，マユの中にはいろんな役を演じる事で自分の可能性を広げてみたいという希望があるからだった。

マユが挑戦し悩み揺らいだのは，ジュリエットをどう演じるかという事であった。4/16の課題②で，マユはロミオとジュリエットの物語の中で身近に感じた箇所を「大切な人の事を悪く言われた時の反論（気持ち）」と書いた。これはロミオの事を悪く言った乳母が部屋から出た後に扉越しにジュリエットが言い放つ《罰当たりな老いぼれ》という台詞から感じた気持ちであった。

5/7の課題⑦でマユは初めてその場面を演じた。しかし，マユはこの日の自分の演技には納得できなかった。事後インタビューでこの日の演技についてマユは「なんか違うな」と思ったと語っている。実際に自分の身体を使い台詞を声に出して演じてみると，ジュリエットという役を本当の意味で演じる事がいかに難しいかを知った。マユはこの場面のジュリエットには他にも色んな感情が入り混じっている事を実感した。母や乳母に裏切られたときは「絶望感」や「戸惑いが隠せない心情」もある事が分かった。ロミオと離れたくないという葛藤もあった。怒りや悲しさという単純な感情をただ当てはめるだけでは台詞を言う事が出来なかった。マユはこの日「罰当たりな〜の所が上手く出来ないと思った。一番難しいなと思った」と書いている。

上手くいかなかったマユは，どうしたらジュリエットを納得して演じる事ができるのか考えた。マユはジュリエットと自分の同じ所を「自分の意志をしっかり持っている所，結局は自分で解決

しようとする所」だと感じていた。マユはジュリエットが持つ意志とは何かを考えた。マユは［宿題］で，もし自分がこの場面の同じ状況になったら「自分はジュリエットのように『大切な人の為なら』と思います」と解釈している。つまりマユは，自分が取ろうとする行動の根底に，ジュリエットが持つであろう意志であり，マユの意志でもある「大切な人の為に」行動するという価値を見つけたのである。

5/14の課題⑨［本番］のマユの演技は，外に表現されたたどたどしさの中にもマユ自身が込めた強い想いが伝わり，終わると仲間の拍手が自然と起こった。その日「前よりも感情は込める事が出来たと思う」とマユは書いた。控えめながらも自分の意志に反しない自分なりのジュリエットを演じられたのである。

④ 役の状況への思いがけない反応による自己の揺らぎ──リカ

生徒達の中には積極的に自分を出さない生徒がいる。ツダ先生はリカやソウタの事を「やるにはやるんですけど，こう積極的にやるタイプではないです。（中略）なんかあんまり自分出さないんですよ」と評している。リカは授業中，真面目にやっている友人を茶化したり，課題をやっても表面的で捉えどころのない態度を取る。本当の自分を見せまいとしているかのようである。

そんなリカの自己が大きく揺らいだのは「ガラスの動物園」の三場のアマンダを演じた時である。三場は，母親のアマンダと倉庫の仕事で家計を支える息子のトムがローラのいる前で激しい喧嘩になる場面である。アマンダはトムが小説を書いたり，夜に映画を観に行っている事に不安を覚えトムに干渉する。トムが仕事よりもお金にならない夢を追いかけている事がアマンダには嫌なのだ。トムは自分の自由の無さに堪らなくなり家を出て行こうとする，という場面だ。

リカが5/28に課題⑫の［三場再演］でアマンダを演じた時は，役ごとに設定が付け加えられた。アマンダに付け加えられたのは〈近所の人にローラの事を心配された。もうこれ以上子供の事で近所の人から何かを言われたくない〉という背景設定であった。

演じる前のリカは，ローラの〈大きな声で叫ばないで欲しい〉という設定を聞いて，いつもの軽い調子で「ははは，うちら大きな声で叫ばないと」とトム役のアユミと笑い合っていた。しかし即興が始まるとリカとアユミの演技には段々と熱が入り喧嘩が勢いを増してくる。ちょうど二人の声が大きくなってくるとローラ役のユウが「ちょっとうっさいよ。頭痛いからちょっと近所迷惑だからさ」と二人の喧嘩に割って入った。するとリカの怒りの矛先が突発的に娘に向かい，ヒステリックな調子で「あんたも働きなよ」とローラを咎めた。

この演技の終了後，一緒に演じたアユミとユウはローラを咎めたリカの演技に驚いた事を笑いながら話していたが，リカ自身は何も言わず落ちた小道具を拾い黙々と元に戻していた。それは自分の中に思いがけず沸き起こったアマンダの感情を鎮める為の儀式のようであった。リカは事後インタビューでこの時の演技を「やっぱ，なんか周りの人に言われてたからっていう，なんだろう，怒りをぶつけちゃったみたいな」と語っている。

その時の演技はそれまでには見えなかったリカの人間としての本質が見えたようであった。だからと言ってそれがリカそのものを表わしていた訳ではない。ただ，この時リカに与えられたアマンダの背景設定，それは最も触れて欲しくない部分を部外者に触れられたというような状況が，リカにアマンダの感情を心の内に沸き起こした。リカは事後インタビューでこの時のアマンダは「ストレスを抱えて」おり「アマンダには心の余裕がない」状態だったと語っている。リカはいつ

も自分を出さないように過ごしていた。リカにもアマンダの精神の張り詰めと同じぐらい自分を守る緊張の糸があっただろう。役を借りて発した「あんたも働きなよ」という言葉によって，リカのそのピンと張った糸が切れたように思えた。リカは演じた後アマンダについて「わりとお母さんも大変だと思った。自分一人じゃ家族を支えていけなくて息子に頼らないといけない申し訳なさがある気がした」と書いている。

5　考察

前節で生徒たちの自己が揺らぐ経験を描いた。ここでは何故それが起こったのか，また青年期の自己にとってその揺らぎはどのような意味があるのかについて考察したい。

青年期は身体的成長が著しい。身体の成長は自分の希望通りになる訳ではない。青年期はそうした代替不可能な自分の身体と向き合わねばならない。また内面の性の認識は身体とは別である。どちらもが自分であってもそれを同時に受け入れていくのは難しい。しかし役を演じる時には，大柄か小柄か，痩せているか太っているかといった身体的な特徴や，内面の性の認識を強く意識させられる事になる。それは役というものが架空のものであってもある種の人格だからである。人格であるからには性別や，行動，話す内容やその仕方（台詞）から想像される人間像がある。役を演じる青年は，そうした人格に自分の身体を持って正面から対峙しなければならない。アユミもジュリエットという女性に対峙した一人だ。その時に働く思考は，自分がその役に合うか合わないかである。アユミのように役のイメージを想起し，自分の身体的な特徴や性が役に合うのか合わないのかという思考が青年期には揺らぎとなる。その揺らぎはそれを演じる者に自己の身体的特徴や内面の性を意識化させる。しかし，その意識化がこれからを生きていく自己に確信ももたらすのである。アユミは最終的にジュリエットを演じるのだと決断する事で，自分は女性であるという確信を得る。青年期の高校生にとっては，役を演じる過程でこれからを生きる自分の身体や性の認識について折り合いをつけたり，選択をしていく事ができるのである。

役を演じる事に挑戦しようという生徒の中には，恋愛経験のない生徒も，あるいは恋愛に悩んでいる生徒もいる。青年期の恋愛というのは自分が社会で生きていく中で他者とどう共に生きていくのかを考える直接的な事象の一つである。そうした大事な事象であるがゆえに，自分が経験していなかったり，上手くいっていないと不安になる。サエもその一人だ。サエは自分に恋愛経験がない為に憧れだけが膨らむ状態であった。一方，役を演じる時に出会う役というのは物語の中で大いに恋愛もし，様々な問題に直面し大きく人生を変えていく存在である。役を演じる事でそうした人格に直面したサエは，その役の人生を自分のこれからの人生と重ねて見る。この先自分はどう生きていくのか，恋愛，結婚はできるのだろうか，将来自分にもそのような運命の出会いが訪れるのだろうかと不安になる。同時にそうした不安は，実際に自分の身体を通して演じる者には，自分だけでは見通せなかったものを具体的なものとして突き付ける。サエは演じる事で具体的なものとして自分の経験にする事で自己の成長を感じた。それはこれから社会に出る青年期の彼らにとって，経験という財産になる。

青年期の課題として，社会に出て行く自己を想像しそれまでの自己と折り合いをつける作業が必要である。それはこれまでに身に付いた価値や意味を吟味し，今後の人生を生きていく価値や意味を改めて模索する試みである。一方物語には様々な価値や意味が含まれている。しかし書か

れた台本には行動や台詞が表わされているに過ぎない。その物語の価値や意味は登場人物がその時なぜそう言うのか，なぜそう行動するのかという裏に隠れている。役を演じる時には物語の状況の中にいる役のその隠された価値や意味を，自分の考えや価値や意味に引き寄せ納得する作業が必要である。なぜならば演じる本人がその役の行動や台詞に納得していないと演じる事が出来ないからである。マユはジュリエットを演じる中で自分の大事にしている「大切な人の為に」という意志，そして価値に気づき納得する事で行動することができた。役と自分をすり合わせていく過程で自分が大切にしている価値や意味に気づきそれは確信となったのである。これからをどう生きるかという事に悩む青年期の高校生にとって，そうした確信がこれからの人生を歩む為の価値や意味となる。マユは事後質問紙の自己の変化について「人に自分の考えを伝えるようになった」と書いている。確信は自分の考えに自信を与え伝えていく事が出来るようになるのである。

青年期の若者が面倒くさがったりあえて不真面目になろうとしたりする不寛容な態度は，自分を傷つけない為のある種の防衛である。リカも本当の自分を出さないように不真面目な態度を取ったり，軽口をたたく事で防衛していた所がある。役を演じる事は，役という仮面の元で本当の自分を隠して行動してみる事ができる実験場である。しかし役という仮面の元であっても自己を露わにする事がある。リカのようにそれは役と自分という人格の重なりの中で即興的に演じる事でより顕著になる。自分もそうだ，自分にも分かるという事が即興ではふいに言葉や感情になる。その言葉や感情は自分から出てきた物であり借り物ではない故に，それは表面的ではない人間の深い理解となる。そしてそれは同時に現実の世界における他者への寛容さにもなる。リカは自己の変化について「まだ変わったと思う所はないけれど，役を演じる事で他人の気持ちを考えたり，共感したり，気遣ってあげられるようになれるのではないかと思いました」と書いている。そうした寛容さは青年期の高校生にとって，世界から様々な物を吸収し生きていく土台となるだろう。

6　おわりに

これまで本論文では役を演じる事によって高校生がどのような自己の揺らぎを経験するのかを明らかにしてきた。それらの経験は高校生である彼らがこれからを生きていく為の自己の土台を形成する物である事が分かった。高校教育における演劇実践の意味の一端が明らかになっただろう。本調査の為に尽力してくれた学校関係者と生徒達に感謝したい。

【注】

(1) 1978年告示の学習指導要領において「演劇に関する学科」の設置が可能になった。また1989年告示の学習指導要領において「その他特に必要な教科」として「演劇」の授業が設置できるようになった。

(2) エリクソン，E. H.（西平直，中島由恵（訳））(2011)『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房，p.95.（Erikson, E. H.（1959）, *Identity and the Life Cycle*, New York: International University Press.）

(3) エリクソン , 前掲書，p.132.

(4) 眞仁田昭（1952）「高校生の演劇活動の心理」『青年心理』3，pp.78−84.

(5) 竹内敏晴（1989）『からだ・演劇・教育』岩波書店.

(6) 石井路子（2010）「R 君の事，二年間の演劇教育と生徒の変容」『演劇と教育』627，pp.16−21.

(7) シェイクスピア，W.（松岡和子（訳））(1996)『ロミオとジュリエット』筑摩書房．を参考にテキストの一部削除や変更を筆者が行った台本を使用した。

(8) ウィリアムズ，T.（小田島雄志（訳））(1988)『ガラスの動物園』新潮社．を参考に資料を作成した。

(9) 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法』新曜社．を参考にデータ収集と分析を行った。